大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

江戸時代中ごろの畸人・谷口一雲による道教伝授：『道徳経』講義・金丹修錬・古道教経典など

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂出, 祥伸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004345

江戸時代中ごろの畸人・谷口一雲による道教伝授

―『道徳経』講義・金丹修錬・古道教経典など―

坂出祥伸

はじめに

天理図書館に江戸時代中ごろ（正徳・享保年間一七一一～一七三六）の間には確実に生きていたと推測される医師（?）谷口一雲なる人物が残した一連の道教内丹法の講義メモや写本などの文書が所蔵されている。これらの貴重な資料を最初に紹介されたのは故・窪徳忠博士であり、それは当該図書館の紀要『ビブリア』十四号（昭和三十四年、一九五九）の誌上で「天理図書館蔵道教資料」と題する七頁足らずの短い紹介文によってである。ただし、その全文が谷口一雲の内丹講義の資料に頁を割いているのではなくて、およそ二頁半をこれに当てているのである。窪博士による紹介から五十年以上も経っているのに、いまだに後に続いて研究を展開されたお方がいないのを遺憾とし、いくらかでも窪博士の論を展開させたいと思って稿を草した。

一、谷口一雲とは

先ず、谷口一雲とはどういう人物なのか。著者不明の『梅翁随筆』（『日本随筆大成』第二期所収）という「大体寛政年間（一七八九～一八〇〇）を中心とした著者の見聞巷談を筆まかせに書き集めたと云う」八巻百二十條の随筆が収められているが、その巻八の「長寿の事」との見出しの文章に、本稿の谷口一雲と同姓同名の医師が記載されている。(1)

下谷広小路にとし久しく住居する町医師佐原一雲といふものあり。会津芦名家の嫡流なれども、その血脉はしるべからず。むかしより此処に住て、近辺の人々は、祖父も、曽祖父も相しれず。生年をものがたりする事をきらへば、いかに心安き人も、たしかにはしる人なし。されども祖父父の出会せしはなしを考へ、時として若年の時の事を申

を以て、年歴を考るに、寛永のころに生れしなるべしと申あへり。見かけは七八十の老齢と見ゆるのみにて、格別替りし容貌にもあらず。しかるに牛込神楽坂に片桐長兵衛といふ御旗本あり。その長兵衛が祖父は、紀州より御供せしもの也。丑年なればとて、苗字を替て下条長兵衛と申せし。生島幽軒といふ御旗本の隠居、享保十年己巳八十の賀を祝ひて、老人七人集会す。その客は榊原越中守家士志賀随翁俗名金五郎百六十七歳、医師小林勘斎百三十六歳、松平肥後守家士土佐治宗見百七歳、御旗本隠居石寺宗寿俗名権右衛門九十七歳、医師谷口一雲九十三歳、御旗本下条長兵衛八十三歳、浪人岡本半之丞八十三歳、宴会せしとて、其節の書面、今片桐長兵衛かたにのこれり。しかるに其の中に出たる谷口一雲といふは、則今の佐原一雲が事なり。此者一人其集会中より残りて、寛政十二年庚申年十二月死す。享保年中尚歯会の書記によりて、其年齢を考るに、凡百六十八歳成べし。稀にはすぐれて命ながきもの有ればこそ、昔がたりにつたへしかども、今の世にかくも長寿なるはたぐひなかるべし。

この記事がはたして本稿で取り上げる谷口一雲と同一人物かどうか保留しなくてはならない。しかし、この記述によれば佐原一雲は谷口一雲と同一人であり、享保十年（一七二五）に九十三歳であって、没年は寛政十二年（一八〇〇）、百六十八歳という。ところが、窪博士の文章では、享保五年（一七二〇）に九十五歳で亡くなったとされている。活躍した時代はほぼ同一時期でありながら、没年には八〇年の差がある。はたして同一人物なのかどうか。窪博士が没年を享保五年とされるにもかかわらず、享保七年の手紙もある。そもそも没年を明示している文書は私の調べた範囲内では見出せなかった。窪博士によれば、一雲は「江戸の呉服橋の外一丁目に住んでいた」のであり、また正徳元年九月六日付けの「初而道家入仙術之門」（「初而入道家仙術之門」と正すべきであろう）の文書によって道士を自任したとされている。

一雲が受講生に向けて行った『道徳経』の講義、金丹の実修と講義について、『道徳經』の講義にはどんなテキストが用いられたか、金丹道の講義についはどんな書物がどのように教えられたか、私の理解できる範囲内で紹介しよう。講義資料は今、天理図書館の架蔵番号１２６―イ３９―１～３６に「江戸時代道教文書」の名で保存されている。

なお、あらかじめお断りしておかなければならないのは、谷口一雲は自身の著述はもちろんのこと、まとまった文書さえも残していないために、経典の写しとか断片的なメモ風の記載などによって一雲の意図を推測するしかないという点であり、あるいは私の推測が誤まっているかも知れないことをご了承いただきたい。

二、「道教」の認識と『道徳經』の講義

先ず、谷口一雲が道教という語で一連の講義を行っていることに注意しておきたい。「道書三通」に「道教如根株、儒教如枝葉、仏教如花実」と記した文書がある。中国思想の「根株」（根底）を道教だと明確に認識しかつ断言しているのである。江戸時代の学者たちで道教という語を使うのは、随筆『塩尻』を著わした名古屋の天野信景（のぶかげ）（寛文元年・一六六一～享保十八年・一七三三）がそのひとりであり、その著『塩尻』巻五十六に「異邦道教盛んにして壮観多く、道士あまたあり、其の道を事とす。其の説もとより多端、清浄一説、棟（煉の誤り）養一説、服食一説、符籙経典科教又一説なりとかや。馬端臨が経籍攷に見えたり。道家第一祖は、道元大師なり。是漢の張道陵也、永寿元年九月九日昇天。」とあって、道教の内容をほぼ正確に認識した上で、「道教」の語を用いているのである。ただし、『塩尻』が刊本になるのは、一雲よりかなり後年のことであり、写本が流布しておれば別であるが、その目にとまっているはずがない。(2)

ところで、なぜ、「道教」の語にこだわるのか、それは、大江文坡（かんぱぼん）（勧化本作者）や同時代の大神貫道（おおがつらみち）（大坂の神官）は「仙教」と称し、さらに後の『黄庭内景経略註』を著わした讃岐の中山城山は道家、道術と称し、平田篤胤などは、「仙道」あるいは「仙法」と称しているからである。要するに道教を「神仙」へ至る教えと理解しているのである。(3)

ついでに言うなら、篤胤が私淑したとされる本居宣長は、『玉かつま』巻十四で、「道教にまどへるか、國の王どもの異さまなる號」の見出しで、唐の玄宗の「承道継玄照明三光弟子南嶽上真人」の號などを「道教に惑へる號なり、拙きことなり」と評しているし、また、「もろこしの國には、道教といふもの、世々に盛に行はれて、大かた佛道とひとしきばかりなり」と述べていて、道教の存在に注意してはいるが、嫌悪の情を示している。

まず、『道徳経』の講義には陳元贇の『老子経通考』がテキストとして用いられた。これには巻頭に「老子道経上　河上公章句」との題があるように『河上公章句』に拠って当時流行した「希逸口義」の註釈を採用している。『老子経通考』の著者陳元贇（ちんげんぴん）（明・万暦十五年・天正十五年、一五八七～寛文十一年・一六七一）は、明末、万暦四十七年（我が元和五年）に来日し萩や江戸に滞在した後、尾張藩主徳川義直に仕え、その晩年、寛文十年（一六七〇）に『老子経通考』を著わした。

『道徳経』の篇名だけメモした紙片が残っている。「安民第三」「検欲第十二」「守微第六十四」などの如く。ただし、刊本として通行していたものを全面的に用いていたかどうか、体裁が異なっている箇所もある。

なお、宋仁宗皇帝の『尊道賦』と明の太祖洪武帝の『道徳経』の註解が読まれていることを指摘しておきたい。

「宋仁宗皇帝尊道賦曰・・・」と書かれた文書があり、これは別に同文が写されている。これは、『群仙珠玉集成』（後述）巻一「賦」に収められている、僅か四四〇字ほどの、賦形式を借りて儒佛道三教のうち道教のみが尊いと説いているもの。この賦をも受講生に読んで聞かせて講釈したようである。

また、「高皇帝御製道徳経序」との文書があり、一雲がこれをどこから入手したのかわからないが、これは『道蔵』洞神部玉訣類には、「大明太祖高皇帝御註道徳真経」の名で収められている。洪武帝朱元璋が道徳経に註を加えたものであり、洪武七年（一三七四）に著わされた。まさか、『道蔵』所収本を写したのではあるまい。なお、『道蔵』所収本との間に若干の文字の異同がある。

三、金丹道の實修と講義テキスト

「金丹」という語は今日ではあまり用いられなくなったが、一雲のメモには、「金丹　精気神」あるいは、「金丹モト名ナシ故」、また、「尾閭穴＝金丹」「理ヲ以テ金丹ニ」などのように、一雲は金丹の語をしばしば用いているし、また、「修性不修命」「父ノ一滴の精ヲ金丹ト云則丹田ニ」などのメモもあるから、丹田に金丹を養う方法や意義を教えていたらしく推測されるので、本稿では内丹と呼ばないで、「金丹道」と呼ぶことにする。

どのような講義のしかたであったのかは、明瞭にはしがたいが、原文の漢文は訓読調であって、「我命有我、不有天」のように訓読体であるから介詞「在」が動詞「有」として写されている。一雲は自分の作った講義用の筆写メモを音読したり、受講生に見せて写させたりしているものと推測される。受講生が何人いたのか明らかではないが、イ39―1（2）に石靭負宛の二通の書翰があって、この石靭負が受講生であったことだけが唯一分っている。

次には、老子の伝記に関連する文始先生すなわち関尹と老子との問答が抄写されている。これは正徳四年（一七一四）五月二十五日と享保三年（一七一八）六月朔日の二度も写されている。

文始先生問㆓老子㆒曰、道徳経修㆑身至妙至要在㆓於何章㆒、老子曰、在㆓於深㆑根固㆑蔕、守㆑中抱㆑一而已。

二度も写されているのは、時期と筆跡とから片方は谷口一雲であり、もう片方は受講生であろうか。ただし、時期が異なっているのは理解しがたい。

この冒頭の記述は伝尹真人高弟之筆といわれ明代に成った『性命圭旨』亨集の「守一」の解説に見えている。（若干文字の異同がある）

ところが、この記述に続けて、

老子曰、中者中宮也、原夫赤子、在母腹中、臍蔕与母臍蔕相連、暗注母炁、母呼亦呼、母吸亦吸、綿々十月、炁足神備、脱蔕而生、亦由菓之受気既足脱蔕而下也、臍間深入三寸、謂之中宮、亦曰黄庭、男子謂之炁海、婦人謂之子宮、吾昔受之於太上大道君口訣、曰勤守中莫放逸者、外不入内不出還本源、萬事畢、勤守中、莫放逸者、一意以守炁海、不可須臾離也、外不入内不出者、令往来之息兀然、注中宮炁海之内、勿使息之出入也、還本源者、臍間乃一萬三千五百息之五蔵六府生炁本以息還帰本源以神馭之、使息住息定者、此至聖至神之道、非天下真仙之才、其孰能與於此也、

とある。この記述がどのような文献にもとづいているのか分からないが、おそらく婦人科あるいは産科の医書であろう。興味深いことに、同じく正徳四年（一七一四）五月二十五日の日付のある「貳通之内」と称されるメモ風の文書が残っていて、右記の文を註解している。

一　講義ハ書ノ名也講義ニ曰クト也
一　文始先生ハ老子ノ弟子也
一　中ハ氣海
一　一ハ金丹
一　相連（アイツヲフル）ハ母ノ臍蔕ト赤子ノ臍蔕ト連續スル也
一　炁ハ氣
一　呼吸ハ息ノ出入
一　炁足ハ氣足也形足也
一　神備ハ本心備也
一　脱蔕而生ハ誕生也
一　亦由菓之受気既足脱蔕而下也トハ樹菓（コノミ）ノ落（ラフル）ニ譬ヘタル也
一　臍間深入三寸、謂之中宮トハ
　深入ハ背ノ方ニ深入也背ノ方ヘ三寸深ク入ト也　中宮ハ氣海ノコト也
一　亦曰黄庭トハ中宮ノ名ヲ黄庭トモ云也、黄ハキ色ノコト脾胃ノコト也
一　太上大道君ハ老子ノ師也
一　莫放逸ハ猥リナラス　ホウラツニナキ也　勤守也
一　外不入内不出トハ
　往来ノ息中宮氣海ノ内ニ注（スミ）此中宮氣海ノ内の息ハ外内不出入也、其故ハ鼻ニテ引息中宮氣海マテ引入ニテハナシ又鼻ニテ突息中宮氣海ヨリ突出スニテハナシ鼻ノ息ハ上分斗也、中宮氣海ノ息ハ内ニ注シテ出入ハセオル也、然ハ則チ勿使（ムルコト）息之出入也ト也
一　萬事畢トハ萬事成就ト云コト也

一　一意トハ一心也無二ノ心也一心ニ気海ヲ守ル也

一　一萬三千五百息トハ

人間一昼夜ノ間ノ息ノ数也

一　以神馭之トハ

本心ヲ以テ息ヲ仕フ也

息ハ本心ノ使イモノ也

これらの注釈の語句をどう理解したらよいのか。先述の「金丹　精気神」「金丹モト名ナシ故」、「尾閭穴＝金丹」「理ヲ以テ金丹ニ」「父ノ一滴の精ヲ金丹ト云則丹田ニ」などのメモと照らしあわせて考えると、金丹の錬成を実習的に説明していたのではあるまいかと推測される。例えば呼吸法は一雲自身が聴講者たちに実演してみせているように想像されるのである。

一雲が金丹道の講義に用いたテキストの一つに、白玉蟾の「修仙辨惑論」と書かれた文書がある。その冒頭の題字に「群仙珠玉二巻十三葉」と記されている。そこで白玉蟾の群仙珠玉集を読んだのかと思いたいが、じつはそうではない。白玉蟾の若い時の著述に、「群仙珠玉集」があったことは、宋の兪琰の『席上腐談』下の白玉蟾の著述を列挙したなかに、その書名を留めていることで知られているが、横手裕氏が指摘しているように、今日は伝わっておらず、これは明・丁応林編『道書全集』所収の「群仙珠玉集成」四巻（前田尊経閣文庫蔵）、あるいは明・閻鶴洲編　万暦十九年丁応林序彙輯刊本『新刊道書全集（金丹正理大全）』所収の「群仙珠玉集成」四巻（名古屋蓬左文庫蔵）と同類のものを「群仙珠玉」と称してテキストに用いていたのであろう。（5）

近年影印された海王邨古籍叢刊本『道書全集』（北京・中国書店、一九九〇年）に当ってみると、「群仙珠玉集成」が収められており、その第二巻に「修仙辨惑論」がある。けれど、「二巻十三葉」すなわち第二巻十三葉に「玉蟾曰夫天仙之道能變化飛昇也、上士可以学之」とあるテキストは不明である。さらに同じく第二巻には「元関顕秘論」が収められているが、その文中の「訣曰用志不紛、乃可凝神、灰心冥冥、金丹内成」の語は、一雲のテキストにも引用されている。以上は状況証拠的な推測であるが、これに従うことにしたい。なお、元禄十年（一六九七）にはすでに白玉蟾の文集、『瓊琯白先生文集』の和刻が刊行されていたが、一雲が利用していたかどうか形跡がない。

唐末五代ごろの内丹書『霊宝畢法』の書名を写した文書があるので、これも読まれていたらしい。上中下各巻から引用し、すべて五十二箇所にわたっている。『正統道蔵』太清部に原題鍾離権著、呂嵒伝『秘伝正陽真人霊宝畢法』三巻として収められている。参考までに、内閣文庫所蔵の明・彭好古編『道言』には『霊宝畢法』三巻があることを付言しておく。

これとは別に、「霊源大道歌五十七丁　神是性兮気是命」と書かれ

たメモがある。これは、明の彭好古編『道言』所収の曹文逸姑「霊源大道歌」から引いたものであろう。曹文逸は北宋末宣和年間（一一一九～一一二六）の女道士であり、「霊源大道歌」九百字は平明な用語で丹功を説いている。『道言』は内閣文庫に蔵されている。

さらに『石函記』写本二冊がある。『石函記』は、正しくは『許真君石函記』二巻であり、東晋の許遜の名に托されているが、南宋ごろの出世と推測されている。内容は、「太陽元晶論」「日月雌雄論」「薬丹論」「薬物是非論」「丹砂證道歌」「聖石指玄論」「神室玄明論」「金鼎虚無論」「明堂正徳論」の九篇から成る。『道蔵』洞神部衆術類に収められている。

また、『規中指南』下（写本）がある。『規中指南』上下巻は元の陳冲素、号虚白子の撰、『陳虚白規中指南』の名で『道蔵』洞真部方法類に収められている。その内容は、上巻は、「止念」「采薬」「識爐鼎」「入薬起火」「坎離交姤」「乾坤交姤」「攢簇火候」「陽神脱胎」「忘神合虚」の九篇で、内丹の功法を九段階に分けて述べている。下巻は、「内丹三要」（玄牝、薬物、火候）から成り、張紫陽、馬丹陽など南宗北宗の師説を述べている。

前記の明・丁応麟編『道書全集』二十四種に『陳虚白規中指南』が収められており、明・朱載堉編『諸真玄奥集成』には『石函記』が収められ、名古屋蓬左文庫の漢籍目録によれば、所蔵の『新刊道書全集』に前記の『玄宗内典諸經註』に加えて、『陳虚白規中指南』が収められ、さらに次に言及する『陰符経三皇玉訣』もこれに収められているのである。

次に、「陰符経」からという引用「人不憂愁思慮而不失其本、去疾病労苦而不失於始形還下土」という短い文が写されているが、これは『陰符経三皇玉訣』巻上の「黄帝曰、如何留形、不失於始也、廣成子曰、人不憂愁思慮而不失其本、去疾病労苦而不失於始形還下土」の文からの引用である。また、『陰符経三皇玉訣』写本一冊があり、同じく筆跡を異にする『陰符経三皇玉訣』があって、前者の写しと思われる。この経典は所謂『陰符経』が唐末五代のころに出世した後、金丹道の影響を受けて北宋ごろに成立したと推測され、黄帝と廣成子あるいは天真皇人との問答体で上中下三巻から成り、精炁の修煉による金丹の養成を説いている。『道蔵』洞真部玉訣類に収められているが、明・丁應林編『道書全集』（尊経閣文庫、東洋文庫）、明代刊本の『新刊道書全集』（蓬左文庫）にも収められている。

さらに、実際の講義にどれほど使用されたのかは疑問であるが、「道書大全集二十自至青天歌註」と表書きされていて、以下のような書名を写した文書がある。

道書大全集二十自至青天歌註
玄宗内典諸經註目録
黄帝陰符經註
太上老君説常清静經註

太上赤文洞古經註
太上大通經註
太上昇玄消灾護命妙經註
洞玄靈寶定觀經註
無上玉皇胎息經註
無上玉皇心印經註
老子説五厨經註
崔公入藥鏡註
青天歌註

その他に、中峯紫霞道人輯『長生丹訣』下という写本が残っている。すべて四十二枚になる。その内容を目次によって示すと以下のようである。これは全体としてまとまった論旨があるとは思えないが、種々の内丹文献からの抜書きのようであり、本来なら、それぞれの典拠を示すべきであろうが、筆者の能力不足のためにいまだに探し当てられないので、今は一部を示しておく。

張真人指迷人帰正道序／修真詩／自憤詩／純陽祖師詩／以心観心詩／玄牝歌／通玄詩　又辨詩／胎息経／却病延年一十六句術／運試五臓升降法／動功六字延寿訣　又訣／修身秘旨／大道歌／水火既濟訣／口伝十六字訣／養身秘旨／秘旨鷓鴣天／玄関一竅子子午流通歌／玉蟾親付陳月岩詩訣／運養心気訣詩　又詩　又詩　又詩　又詩　又詩　又詩／學道增進詩／張紫陽修真要語／修真守命要訣／司馬真人坐忘銘／張三峰祖師延壽群書目録／玉渓李真人修丹秘訣／三教一元／大道正宗　括言　又訣／玄機問答／一体玄関／外三関／三丹田／三宝分煉／丹祖四真／陰陽二気／三乗妙用　経言　経言／長春真人派字號／第一篇行功指引／第二篇静坐功夫／陰海陽海　又訣／太上老君築基作用／房労致百病説

四、古道教経典の写本

『江戸時代道教文書』の中に、包紙の表紙に「度人経」と記されたものがいくつかある。

「道書二十通」の最初は「度人経序」、別に「度人経序」との文書があり、中には、

許真君曰／呂洞賓曰／参同契中篇曰／太上玉枢経髄曰

と書かれている。

現行の「度人経」は、詳しい経名は、『霊寶无量度人上品妙経』である。現在『正統道蔵』洞真部本文部に六十一巻本が収められている。この六十一巻本は北宋以後に出世したものとされる。この経典は元始天尊から授けられたとされる古霊寶経の重要な経典である。江戸時代当時、

『道蔵』が我が国に舶載されていない中で、これが果たして正真正銘の「度人経」であろうか、と筆者は疑問を抱いた。しかしながら、表書「度人経霊書」には、以下のように記述した内容があるのに注目したい。なお、□内の文字は判読不能。

霊寶无量度人上品妙経卷四十二第十八
諸天中大梵隠語无量音　道君撰
元始霊書中篇
東方八天
□婁阿薈、无愁観音、須延明首、法攬□曇、
南方八天
西方八天
北方八天

道言、此諸天中大梵隠語、无量之音、舊文字皆廣長一丈、天真皇人昔著真人、以為正音、有知其音、能齋而誦之者、諸天皆・・・・

この記述を現行の『道蔵』所収の「霊寶无量度人上品妙経」と比べてみると、その巻四十二の第十八葉には、

諸天中大梵隠語无量音　道君撰
元始霊書中篇

とあって、まったく同じであり、続く「東方八天」も同様である。ところが、その後の四言十六句の文言は、一雲の写本では、

□婁阿薈、无愁観音、須延明首、法攬□曇、

となっているが、『道蔵』本では、

緑應昭符　黎學道蘇　熙南允封
契天合魚　英晃爽夕　麓素凝濡
・・・・・　・・・・・　・・・・・

このように異なっている。一雲は、『道蔵』所収の「霊寶无量度人上品妙経」とは別の「霊寶无量度人上品妙経」を見たのであろうか。参考までに楓山文庫には明・崇禎十五年刊『太上洞玄霊寶量度人上品妙経』一冊が伝存している。

また、「大洞經」と題された文書がある。その標題には「大洞玉經卷下第三　上清八皇老君道経第三十三」と書かれ、本文には、

玄契曰、己身精炁、煉化紫金、六位已昇、妙行大全、長生無窮、太玄真人、至此面光、開度胎根、七祖九玄、並解回結、断除債訟、閉塞死戸、應同炁同根、蘇懋生津、延益萬神、同超真王、和合萬炁、妙行並全、皆號太玄、會明陽天、我獨超出、證大洞尊、帝一龍光、號無上玄通、

と書かれている。「大洞玉經」は今、『道蔵』洞真部本文類に収められている。確かに、その巻下には「上清八皇老君道経第三十三」との表題が見える。ただし、巻下第三ではなくて第十四であることと、上記の「玄契曰」のような文言ではなくて、一句五言、八句が添えられている。「玄契曰」以下は『玉清無極總真文昌大洞仙経』（『道蔵』洞真部玉訣類）

巻九末尾の文を写している。ここでもまた、一雲は『道蔵』所収の『大洞玉經』とは別本のものを引いているようである。『大洞玉經』が古道教上清派の重要な経典であることは言を俟たない。

一雲は『雲笈七籤』をも読んでいる。

「元気論曰首生盤古、垂死化身」と書かれた文書がある。これは『雲笈七籤』巻五十六「諸家気法」所収の「元気論」からの引用である。「雲笈十二巻四十七丁」「雲笈四十八巻十三」などと記された文書があり、また、「石函記」（写本）の後のメモにも「笈十二巻十二葉黄庭内景二十八章」「笈十二巻四十六丁四十七丁」などの記載がある。これらはすべて、『雲笈七籤』からの引用である。「雲笈十二巻四十七丁」には「仙人道士非異有」注「度世非有他神、守一堅固、精神内守、千載不死」との文が写されているが、これは『雲笈七籤』巻十二「太上黄庭外景経」上部経第一の文である。「雲笈四十八巻十三」には、「東方朔曰夫病之来、皆従陽脉起」との文が写されているが、これは『雲笈七籤』巻四十八「秘要訣法」神枕法の文である。「笈十二巻十二葉黄庭内景二十八章」とは、『雲笈七籤』巻十二黄庭内景経第二十八章仙人章を指している。「笈十二巻四十六丁四十七丁」も『雲笈七籤』巻十二太上黄庭外景経である。一雲は『雲笈七籤』を読んでいて、特にその中の黄庭経を重視していたことが分る。

また、『金丹妙海』と名付けられる写本がある。これもまた谷口一雲の読書箚記のようであり、読んだ書物からの抜書である。どんな書物を読んでいたのかを書名の記載のあるものを挙げてみよう。

『太上感応編』（ママ）『養性論』（これには細字添え書きで『玉匣記』七十七葉とある）『真誥』『石函記』『霊宝経』『大洞経』『石指玄篇』『石金虚無論』『石太陽元精』『黄庭内経』（黄庭内景経）の誤写か）『無生訣』『消搖墟東王公伝』『消搖墟浮丘伯伝』『鬼谷子』『悟真篇』『玉胎経』『北斗経』、そのほかに仏典の禅語をも読んでいたらしいのが注意される。本浄禅師曰、善恵大士曰、僧璨大師曰、恵能大師曰、景岑禅師曰、仲宣禅師曰、紹悟禅師曰、大弟和尚曰、天台智禅師語云、などからの禅語が引かれている。

まとめ

以上に谷口一雲の道教と金丹道講義について紹介してきたが、一雲の人物、事蹟についてはほとんど明らかにできず、また道教などの講義の具体的なイメージも提示できず、ただ、用いられたテキストの解説にとどまってしまった。それにもかかわらず、全体として、かなり高いレベルで、幅広い視野での講義内容と言えるのではなかろうか。

一、道教関係の資料を一雲は「仙教」「仙法」などではなくて、「道教」と認識していた。

二、『道言』『道書大全集』などの近世の道教経典を収めた叢書を通じて、金丹術を知ったと推測できる。

三、金丹道の講義のテキストは、大部分が今日ではあまり顧みられていない内丹書であるが、江戸時代では、『道書大全集』のような金丹道専門の叢書が入手しやすかったのかも知れない。

四、金丹関係の経典だけではなくて、いわば古道教の経典、『度人経』『大洞心経』をも読んでいて、視野の広い講義である。それにしても、これらの経典は今日では『正統道蔵』によって容易に読むことができるのであるが、江戸時代中期という『正統道蔵』が舶載されていなかったと思われる時代に、これらの経典をどのような手段で読むことができたのであろうか。どうか大方の御教示を切にお願いする。

注

（1）『日本随筆大成』第二期第十一冊（吉川弘文館、一九七四）。なお、神沢杜口『翁草』（寛政三年、一七九一）にも、同様の記事があるというが、未確認。『翁草』は『日本随筆大成』第三期第一九冊～第二四冊（吉川弘文館、一九七八）

（2）『日本随筆大成』第三期第十五冊（吉川弘文館、一九七七）

（3）大江文坡の仙教については、拙稿「江戸中期の戯作者・大江文坡の仙教―道教との関連で―」（『森ノ宮医療大学紀要』創刊号、二〇〇八）、大神貫道の仙教については、拙稿「江戸時代の神道家・大神貫道著『養神延命録』について―道教内丹説にもとづく神道的養生法―」（『東方宗教』第一一八号、二〇一一）、中山城山については拙稿「中山城山の『黄庭内景経略註』について」（大阪府立大『人文学論集』第29集、二〇一一）、平田篤胤は仙教とは称さず、「仙道」と称していて、多方面にわたって深く道教を理解しているにもかかわらず、ついに「道教」とは称していない。拙稿「平田篤胤の『黄帝伝記』について―神道と道教との関連で―」（関西大学『中国文学会紀要』第34号、二〇一三）、拙稿「平田篤胤の『葛仙翁伝』『赤縣太古伝』について―道教との関連で―」（『東洋の思想と宗教』第29号、二〇一二）参照。

（4）陳元贇の来日と日本在住時代の活躍については、小松原濤『陳元贇の研究』（昭和37年、雄山閣）が詳しいが、その後、梁容若「陳元贇評伝」「評小松原濤著《陳元贇研究》」（同氏『中日文化交流史論』（北京・商務印書館、一九八五　所収）があり、梁氏の論文では小松原氏の著書のいくつかの誤りを訂正している。『老子経通考』は葛洪の撰とされる河上公章句本に拠っている。道徳経本文、章句、それに通考と称する陳元贇による細字の注解という構成であり、それぞれ大字、中字、小字双行となって

いる。今は、『和刻本諸子大成』第九冊（汲古書院・一九七六）に影印本が収められている。これは、我が国の老子受容がすでに王弼注に傾いていた時期に、これに反発して河上公注に拠ったという点で興味深い。その自序末尾は「庚戌之西候、大明竹林既白山人陳元贇拝撰」と結ばれていて、この庚戌という年は、清の康熙九年に当るが、その元号を署さず、さらに祖籍に「大明」と加えていることで彼の政治的立場が表明されている点に注意したい。

（5）横手裕「白玉蟾と南宋江南道教」（『東方学報京都』第六八冊一九九六）。